
兵士不純1 10

猫離脱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兵士不純1 10

【ZPDF】

Z0829L

【作者名】

猫離脱

【あらすじ】

軽くなつて空でも飛ぶつもりかい。
夢の中ではさもあらん。

走り屋専用。

たとえば楽しい時間ははやくすぎ苦痛な時間は長く感じる。田上はこれを省略というか圧縮して月単位で計算できた。田上は規則正しい生活をくりかえしてきた報いだと考えていた。

2月は夜の九時から午前2時までが濃い時間で、疲れているときはここでねむると何時間分も多く寝た気になり疲れもとれる。またその時間にいたるまでは急に突入するわけではなくグラフの波のように頂点と谷がある。

時間のすすみを加速させたり鈍化させたりを意識的にさせるのは田上には無理な気がしていただがこれは誰かがそうしていることで個々にゆがみがしうじているのではとおもうのだった。だが漠然とだが時間は誰にも平等でたとえば自己に都合良く一日でも月単位でも操ろうとした場合必ずどこかでその帳尻を田上の時間でうめあわせるのだ。

そのスイッチがおくられてきてきた。かれらはさんざんに使ってきて最近そのことにきづきながら眠りにつかなければいけなくなつた。かれらが活発で濃密な活動をしていた間彼らにしたら眠つていたのは私だつた。

あなたは時間をまわしすすめまた次に引き継がなければいけない。時を止めてはいけない。時の調和をはかつてはいけない。そもそも長い間かけて人類はこの歯車をまわしつづけてきたのだ。

しかしあたしにはやることがなかつた。時間の仕組みと自由に使え

る金をしてまだぼんやりしているのだ。

ただ、このままでいけばわたしの時間が止まつてしまつておわりだ。それと同時にまがりなりにも人類の歯車をとめることへの責任には応じかねた。

丁度部屋の整理をしたばかりだった。今回も捨てるものの他大事なものなど見つからなかつた。貯められるものなどなくあつたとしてもそれは部屋ではなく別のところにあるのだ。自分の中とか世界の空氣とかまだ扉の向こうと互換性が保てる内に田上は至宝を引き継ぐべく旅にでることに決めた。

ぶつかるにはだ。私のやり方を変えなければならない。意図的行動に無駄をつけ、感情に甘えをだし、世間様と交わらなければいけないだらう。

できるかどうかではなく、やるのだ。いや、やつてみようと思つ。なるようになるし、だめもどだし、わからないのだから、天氣は晴れ、星占いは、まずはこのエリアで3週間様子見。

囲うとはどうこうとか貯めるとは保管するとは年金とはどうこうことかを考えて田がな歩いた。電車に乗り通勤気分、街のランチ、タベの公園。残業、時に飲み屋、コンビニ。

星占いは4位で満足していた。12分の4は悪くない。田立たないが好位置だ。1位と2位と3位には負けるが4位とは引き分けてあとには勝てる。

世界の日々の邪惡に打ち勝つために緩慢な動きで勝ち越しできるのは4位からだ。

一日起きて一位で外に出て勝つて、2位で勝つて3位で勝つて4位

5位となつてもたまたま勝つてうまくいけば6位7位でも勝てるかもしれない。注意深くして8位で勝つて引きこもり、勝だけを続けて引きこもり、一年365日の内を勝ちあがり、次の年には前年に引きこもつた分を1位2位3位で勝ち抜ける。何年かかってでも1年のすべての日に勝ち越して記憶すれば負け知らず。あとは勝つてきたイメージだけで戦える。7位だろうが8位だろうが怖くない。勝ち続けられるんだ。

だんだん落ちてきた。これくらいであつだらうか。もう少しだらうか。

たぶんこの不安は正しい。もう少しだ。近づいている。

2

人が死ぬ話はきらいだ。

だから最初にしてしまおう。人が死んだ。

そのせいで逃げていてる人がいる。

逃げる意味など気付いていない。若く見えるが25・6くらいだろう。逃げると言っても走つたり後ろを振り向いたり、誰か友人にたすけをもとめるそぶりすらない。

彼は出来上がってている。かれはそうなつていてる。揺るがない。何十年とそうしてきたから。そしてこれからもそうしていくから。そうならぬようになるにはあと何十数年かかり誰かがつきっきりで見てやらなければならぬ。

一見かれは揺るぎなく歩をすすめる。誰も彼の行く道を疑わない。誰もがかれはどこかに確かなどこかに向かっているとしか思わない。そう思つものがあつたとしてもだ。

AポイントからBに入る。今日はここで休息。

我々の仕事も一休み。移動距離5。徒歩、電車。マップに線を引く。疲労はないはずだ。

どんな夢を見ている。ただそこに向かう夢か。まだ初期の段階か。地点に向かうだけか。お前のその夢は場所への到達を意とするだけか。

BからCへ。

空気は上位。水も上位。食物は中位。音楽、あるいは本といった芸術関係は下位と言つには表現が難しいが多数の氾濫という意味では下位だらう。

太陽の効果を考えたことはあるか、太陽は唯一無一の存在だ。それが消えたらどうなる。

代用品を探すのか作るのか。数で補うか、記憶を馬鹿にしちまうか。

捨て駒になるのはイヤだ。誰もがそうだ。

毒を食うのもイヤだ。負けを開始させるのもイヤだ。

HからEへ。

移動の間隔が少なくなっている。距離も時も。そろそろか。終点は。

3

葬儀があつたのが確か4年前だ。そして冬でオリンピックがあつた年だ。あれは2006

、2006、2002、1998、1994どんどん4引いていけばどうなるのか今度計算機で試そうとこんな時に思う。

父が死んだ。祖父が死んだ。4年前が祖父であれこれ親戚中が大騒ぎした。今回もそうだ。

なんとか火葬を終え、もういいだらうと思つたわけではないが、朝

早く目覚めた私は荷物をまとめ家を出た。

夢をみたからだ。火葬を終え朝に家を出る。そういう夢だった。

朝ご飯、ホテルの朝ご飯は混雑していて食べる気が失せる。何度も時間をずらしてもうまくいかなくて最後の20分にかけたらただひとりだった。後片付けを脇の方からそろそろし出そうと係の人があがうかがう中、5分で支度し5分で片付けた。5分でコーヒーを飲む時間が与えられ3分で人があらかたしわくちやにした新聞に目を通し最後の1分を残し食堂をでた。

記録屋でヘッドホンをして1時間。本屋で中古の小説を立ち読み帰途につく。今日は一日足止め。夢は見ないが、音楽と本との関係はあるのだろうか。

終日ホテルの部屋でテレビ鑑賞。といつても、アメリカの映画を2本続けて見た後、サッカーの試合を眺めてまた映画、ニュース、ショッピング番組。アナログの砂嵐を無音で視聴。

しばらくホテルの部屋からでなかつた。フロントとは電話でやりとりをした。一日一回ルームサービスを取ればいい方だった。2週間ほどつづいた。寝ておきて寝ておきてを繰り返した。これまでのリズムを繰り返した。一日酔いならぬ寝過ぎて頭がいたのを回避する方法も覚えた。

居づらくなるとホテルを転々とした。夢は見なかつた。夢を見るために眠り見れないとわかるとホテルを変えた。それを繰り返すともはやどこにいるのかもわからない。

朝、四時半だったが外に出た。足がふらついたが目は覚めていた。街は新しく新鮮に感じられた。

まだ薄明かりで、しかし、という声にひきづられてその方を向いた。電信柱に一人の影がありなにか張つている。

短期仕事募集 食事宿舎完備。 バイトの広告だった。

こんなんで、という声を追つて声をかけた。

向こうもこっちも驚いた。

今は何時だと思っているんだと思った。

その一人は関係者だった。

これまで張つてきた張り紙を剥がしていくことが最初の仕事になつた。

4

すばらしい世界。美しい空、朝、光、風、臭い、歩み、左、右、車のガス、自販機のメニュー。

それらが続いた。

打ち付けのコンクリの冷たさと清潔感といつたら活動中の蟻も穴を忘れる。花が咲いている。アフリカみたいに奪い取ってクリームで覆う。

きつとやうだらうと思つ。

私にはそんなことしか浮かばない。私が私であるよりも私がゲームの中でロップルとしてあることが大事。やめられないしそれにしかするものはない。中毒と言うがそのとおりだ。やめてしまったらそれまでの時間を振り返る勇気がない。

パラディンだつてなにものか。聖騎士？。たぶんあいつだ、わたしにはわかる。管理者の一族。今度は別の手で私に関わろうとしてきているのか。何年ぶりの再会。しかしながらベタだ。あまりにも。過去ログもとつてある隠せない。話しぶり、行動、勤務時間。要注意。しかし私の腐海にかなうはずはなくただいるだけ、ただ存

在して言葉を発し言葉の糸を繋いでくるだけ。そこまでだ。情報網を巡らせて、あいつに注意。情報求む。さらに過去ログを探る。4年も前か、私がわーギャー騒ぐだけのひよっこだったころ一緒に歩いた。で、私は調子に乗つてしまつて。

いじこちのいい場所を確保して動かないのだ。その為の努力を続けている。だれにも文句は言わせない。影でいつてるのかもしれないけど表ではそんなことしたらどうなるかみんなわかっているからそぶりさえ見せない。

いらっしゃいらいらいらする。特にうまくいっていないわけではないがむしり取りたくなる。相手が機械ではだめなのだ。がんがんに潰す、言われも意味もなく潰す。そうしたことをする場がこの世界にはありそこで私は暴走天使とうたわれる。ここでの記録は時にいる人だけ記録も残らず自分に降りかかる言葉など誰も振り返らない。ただ吐き捨て潰し徹底的に連打する。爽快感とも違う。いじめでもない。聖域。なのかはしらない。呼吸をする場。息継ぎ。私はさんざんにやつづけてやつてへとへとなり、ほてつた体と心をもてあまし離脱し服を脱ぎ風呂場に行つて湯につかる。私はあたたかな浴室で香を焚き白い泡をふくらませ体をまさぐりタイルの上で跳ね、踊る。私はすっかり綺麗になる。浴室を出ると荒廃した部屋のあかりが神々しくも聖女を待ちわびており私はまたかと覚悟を決めるのだった。

裏、裏、裏。進めども進めども裏裏裏。それは離れていくことを意味する。まあ私の最初の目標が違つていたら近づいている。そして目標を忘れてしまつたり最初の目的が違つてきたりしたらどうでもいいことを意味する。

進めない。

消費は浪費とは違う。退屈は敵。予定をとにかくいれる。土、日、月水金。眠るのはいつでもできる。明日は仕事午後から。新しい服を買って、お金がなくなったらちょっと仕事をこなす。数日の我慢。夜にはイベントこの服を着ていこう。みなに連絡調整。集合場所に遅れずに、さあ今日はもうねるよ。ああA-L-Lだよ、朝は覚悟、今度のイベントはでかいし、昼までに終われば御の字かな、ほんと寝るから、これ以上は無理、じゃあ。明日。

今日の明日、明日の今日。

みんなそろった? いないひといない。連絡とれたら連絡して。出発15分前。

ワルシャワホワイトの扉には押すとも引くとも書いてない。中に入つてとりあえず乾杯しようか。テーブルに椅子を並べて、1・2・3・まだ足りない、足りないよマスター、まだ1階。このビル貸しきるのつていくらだる。まだテナントはいる前だからつてやり過ぎじゃね。何階だけ42階。あーありそう。隠し階とかさ。えつとひとり2千として2週間で、だいたい12パーティーで日250組。お金のこと考えるよりはさ、めいっぱい自分たちが楽しんだらよくないつていつもいつもいってること。そそ。ではではかんぱーい。

みながみな個別にどこへ向かっているのか。わたしたちは仲間で動く。止まるのを恐れて走り続ける。わたしたちはみな勇者でいかしていく怖いものはない。1段2段3段と階段を上り2階3階4階と昇り詰める。

これだから日本人は恐ろしい。こんな年端もいかない小僧にまで教育を施す。しかも訳もわからずにいさせる。ただ念として伝えるた

めだけに。それがわれわれにはどれだけ難しいか、われわれがその部分にどれだけ心をくだいているか知つてかしらすか、ここではそれが普通におこなわれる。

爺さんは杜氏は憤慨していた。小さながらだははち切れそうで細い顔が赤く上氣していくのが見えた。

不老不死の話し知ってるか、内の杜氏詳しいから聞いてみな。先輩の後藤さんと島崎さんが促しほくは聞いてみた。不老不死ってあの除福伝説とか始皇帝とか東方の蓬萊山とかですよねと気軽に話しかけたのが間違いのようだった。お前はなんでそれをしつている。どこで聞いた。誰に教えられた。とすごい剣幕でよくしてられたのだ。

あ、あー。ぼくは言葉にならずよひやく、漫画とかテレビとかで昔みたことがあります。だからといって詳しく知つてるとかそんなんではないし、だから聞いたんですけどね

とこうのが精一杯だった。

周りのみなはぼくらのやりとりを笑つて見ているのだった。

杜氏の先祖は中国人で杜氏は今も不老不死の研究のため日本にいるのだという。ただ、一緒に生活し研修していた家族であるひとり息子が中国に帰つてしまい、今はひとりもんもんと日々の生活と仕事と研究に生きているのだがそれを引き継ぐべきものもいないのだった。だから、いつも憤慨している。

研究について本当なんですかと聞いたときも怒られた。

怒りつくし息もきれ落ち着いたときからよひやく爺さん、いや杜氏に仲間として認められた気がするからおもしろい。

ぼくは小さな造り酒屋でバイトすることになった。

本格的な仕事は来月からなのだが行く当てのないぼくはすぐにでもとその間無給でもいいからと住み込みを始めたのだった。

朝早くから起きるのは慣れていた。仕事開始に向けて酒蔵にはどん

どん人が集まつてくる。

仕事の当日前くるつて人もいるし、後藤さんや島崎さんのようにこれから数ヶ月つづく仕事と生活に慣れるために早めに来る人もいる。丁快山水 療で見つけた酒のラベルをみてもぴんとこない。小さな酒蔵でそもそも作られた酒の99.999パーセントは中国へ送るらしい。あの残りは造つたおれたちが呑む権利があるとのことだつた。

それには、後藤さんが言う。

毎年味が変わるんだよ。だから市販にはむかねえ、オレはよ馬鹿にしてるけども、爺さんは不老不死の酒を造ろうとしてるのかもな、そうおもうんだよ。

そしてさ毎年中国に酒を送つて試してもらひ。向こうの人ももうそういう期待もしてないし信じてもいなはなしさ。多分さ金があまつてあまつて仕方がない中国のお金持ちが毎年日本から酒が送られてきて、それが不老長寿の研究をしている爺さんからの贈り物とあればみなに縁起物としても配れるし、商売的にも悪くない。爺さんはそういうところに雇われてるんだと思うね。島崎さんが続ける。
まあ、オレらの推測だけだ。

給料も結構いいし爺さんはしゃんとしてるしいなくなつた息子もいやつだった。あいつがいなのはかなり堪えてる見たいだけどやるしかないつてわけさ。それから、オレら爺さん爺さんいつてるけど仕事始まつたら杜氏さんだから、まあ、それは始まればわかる。爺さんが違つたようにそうあのお前怒られたみたいな感じでくるからな、覚悟しよけよ。

杜氏を入れて8人。主として2人ひと組で作業を行つた。ぼく以外はみなベテランで馴染みのようだつた。ぼくは杜氏と組だつた。お前が息子代わりだとみなみ言われた。杜氏の使いパシリだつた。二人ひと組で運ぶものは免除させられたが、一人分のときは杜氏の分も運んだ。洗いも一人分。時に作業の指示も走つて伝えにいかされ

たりした。杜氏が起きる時分に起き杜氏と同じものを同じ量だけ食べべた。

食べ物については仕事に入る三日前から断食ではないが一日一食と決められていたから問題はなかった。ただ筋肉が続かなかつた。深い筋肉痛で仕事をし寝て起きて仕事をし無我夢中だつた。

みなに言わせればこれもで気を遣つてもらつてゐらしい。休みはなかつたが無理なことはさせないし見てるだけでいいと言つこともあつた。ただ、ほぼ一日中藏にいた。

寮とはいえ家が近くにある人は仕事が終われば帰るし休日もある。ただぼくだけはここにいろいろと指名だつた。

息子の代わりなんて無理だしやだなあと思つてゐるとある休日の日言つのだつた。

ただただただ言つのだつた。ぼくに一言もいわせず言つても言葉が通じないようなふりをした。本当に通じなかつたのかも知れないが。そんなことがあるのだろうか。互いに話すのは日本語なのに。

お前はなぜここに来た。大事な息子がなくなつて役立たずのお前がきた。お前を息子の代わりだと思つたことはない。問題を起こされではかなわないからワシ自身が見ているのだ。名前は何といつ。生まれは。父は母は。兄弟はいるか。何歳になつた。

ぼくは答えなくとも良かつた。答えを望んでいるわけではなかつた。お前はこんなところで何をしてゐる。お前には秘宝は教えない。お前にはつかめない。たとえお前が何か探りに来たやつだとしてもお前には無理だ。見つけることができない。

さあ仕事だ、洗え。これをすっかり綺麗にするんだお前が綺麗になつたと思つたら思つた瞬間からその三倍の道のりを帰るよつに洗いまた戻つてこい、わかるか計算はできるか。お前は馬鹿か。

さらにぼくが洗いの作業をしていると道具をだしてきてこれは何といつと聞いてくる。手を休めずに答えろというわけだつた。

わからないといつと何とかと大声でいう、お前もさあと促され何と

かと叫ぶと次々と新手の品を出してきて叫ばせる。次の日仕事場でその道具は使われ、ぼくはその道具を取つたり来たりして最後には洗いの作業が待っていた。

とにかく何かの修行のようだった。

ぼくは眠つていたが眠つていらないような気がしていたし仕事をしていたが仕事のような気がしなかつた。しいていえば爺さん、杜氏の人生を生きていたとでもいえばいいか。杜氏に生かされていったというべきか。魂を吹き込まれていった。ただそれは借り物にすぎなかつたが。

休日の度に洗いながら杜氏と会話するのが日課になつていた。ある日は機嫌がよいのかお前に不老不死の薬の話をしてやろうといつだした。

ぼくはぼくがその話しを聞くためにここに潜り込んだ密偵だつたらと、スパイとは言わずあえて密偵という言葉をぼくは使つたのだが通じなかつた。

だとしてもお前は変わつたと杜氏は言つのだった。

お前ワシが何を造つているか知つていてるか。不老不死の薬ではない。酒だ。ワシは酒を造つている。それを知つたら息子はでていつた。息子は長い間ワシがここで不老不死の薬を造つていると疑わなかつた。あれは最初から居すぎた。日本で生まれてからづつとワシについていた。最初つからそう信じて疑わなかつた。

ワシは不老不死の研究はしている。薬は造つていない。ここで造つているのは酒だ。不老不死の薬は山にある。蓬萊山じゃ。息子はきっと山に入った。そして帰つてこない。

お前はここをでたらどこに行く。山にいくか、入つて不老不死になるか。不老不死の薬は山にある。不老不死になりたかつたら山に行けばいい。お前は見つけるだろつ。息子のように見つけるだろう。息子は帰つてこない。お前は山に行くか。いったら息子に帰つてくれ

るように入つて欲しい。まだ間にあうから帰つてきてくれと伝えて欲しい。お前が山に入つたらそつて欲しい。ワシはもう年だから酒を造るしかできない。

不老不死の話をしているのか息子の話をしているのかわからなかつた。

その週は寒く、夕食になると酒がみなに振る舞われた。杜氏の許しがでたとのことでみな機嫌が良かつた。そろそろ仕事の終わりが見えそうなのだ。あるものはまた田んぼ準備が始まるのでうんざりだといいあるものは長期で温泉街に行くといった。後藤さんは観光バスの運転手とタクシー運転手の兼業が始まららしい。島崎さんは地元で漁師。みな地に足がついてそれぞれの生活に歸つて行くのだ。ここで的生活も毎年の仕事の一部でしかない。ぼくは人生の深さを見た気がした。みな一生懸命に働くがそれも一部なのだ。また次へと進みはじめる。ぼくなんかはうんざりだというのに。小学校から中学校高校大学バイトをはじめてやめてまたはじめてその繰り返しに耐えられない。

しかしその日は生まれて初めて酒を飲んで眠くなり周りのがやがやをよそに眠りについた。

山を彷徨つていた。足下に蛇がいて驚くのは夢の中に入つたばかりの自分だった。夢の中の自分を夢で見ている自分は蛇に驚いたがもう一人の自分は蛇のあとを追つていた。足は泥だらけで息が上がつていた。すこしぶらすらしていたが進む足は衰えなかつた。

蛇は消え歩みは止まり大きな木の真ん中に背をついて休んだ。上を見上げ光が差した。まぶしかつた。

ああいないよ。あいつはここを去つた。ここには誰もいない。ワシ

以外はな。来年と2週間前にでもまた来い。そしたら会えるかもな。仕事がしたかつたら更に前に来ればいいさ。使ってやるよ。心に届かない替わりに翼を得たものよ。

ああそんな馬鹿な。田上は思わず膝に手をついた。こんなはずはなかつた。慎重に進めたはずだ。彼に逃げる場所などないはずだつた。もう少しのはずだつた。こちらがあわせてきているのだ。彼が進むのは意外だつた。

老人を見た。なにか知つている。なぜ彼を知つている。なぜ私を知つていてる。

手のものか。そうとは思えない。

早くここを立ち去らねばという思い、ここでしかつかめない手懸かりを求める思いが交錯して動けない。言葉が出ない。私はまた失敗した。今度は何を得るのか。私は怒りにまかせ目を覚まし翼を広げて垂直に舞い上がつた。

高く高く舞い上がりやがて疲れ果てひらひらと舞い散る木の葉のようにたどり着いた山があつた。麓の大きな木の下に眠る男を見つけてた。

おれにあしたにむかわせてくれ。

7

イベントが終わつた後ですっかり会場は干上がつていた。人影もまばら。私のようにタフなのはいない。みなどぎやあぎや騒ぐのもいいが、閑散とした空気感も捨てがたい。みなで酔っぱらつてむちややつてばいばいしてひとりになつて何かほつとする。人がどんどん倒れていつて私だけが残される。歯を食いしばるでもなくひとりただ無心になる。周りの景色を眺める。わたしたちが騒いでいた場所。今度は場所が騒いでわたしたちを眠らせる。仲間はいなくなつた。解散した後戻つてきて余韻にひたるのが私のやり方だ。思わぬ拾いものか旧友より連絡が入る。

半年か一年。以前はよくきていた子だ。事情あつてじばらくこれないとのことだが連絡をよこした。

私はきれいな気持ちで返事を返す。

バーのカウンターでひとりで呑んでるきさな女の気分だ。

そう。

山のこと。

聞くのね私に。

私は言つてやつた。

あなたの故郷の山は北面すなわち北から見ると火の山。南から見ると水の山。火は火山。水は水よ。豊かな水を生む山。あなたは北から入つて南より出るといいわ。

なぜ知つてるつて、それは調べたから、聞いたから。両方よ。

あなたが知りたいこと。聞きたいから答えた。昔の仲間だからうれしくて調べた。聞いてあげた。それだけ。

ほかに問題は、ない。

そお。こちらはあいかわらず。

私もあいかわらず。

今日はよかつた。

そうぶつづけ。

じゃあ、また。

ひさしぶりに私が私になってしまった。ほんとうに疲れているが心地よさがまさつて寝るにねられない。目を覚ましながら眠つている感じ。ともあり遠方より来たるうれしからずや。部屋の掃除をしようと思いつく。ふたを開け捨てる。袋を開き投入する。掃いて集め流し込む。もうひとりの私はひと仕事もふた仕事もおえ、わたしはみじごとを終える。考えて4つめで5つ6つと考えが浮かびそれがどう結びつかの答えが出そうなところでまぶたと閉じて眠つた。少し整理された部屋でねむりについた。

綺麗な体になつていたのだろうか。仕事を終え、故郷に帰る。一升瓶を2本カバンに詰め一本の口は開いていた。食事を取る氣がしない。街は塗りたくられていて騒音がひどかつた。人々と臭いが充満して目障りだつた。食欲がない。お腹がすかない。酒の80パーセントは水だという。ぼくはそれを少しづつ呑んで進んだ。すこしづつだ。

街はいろいろと喧嘩音とわざわざの行つたりきたりが多すぎた。人々が街で生きているのを見るとうんざりした。自分が普通の人の膝のあたりの空氣で通る地下鉄の乗車員のように感じられた。とにかく隙間を見つけて汚染していくのが時間なのだろうか、高きから低きへ流れる水の条理が常ならば、見えないところで蒸発しているのは誰の作業なのだろうか、そういうことをしている人。見えるのは見えるところ、見えないところでも見えないところ。それ以外の隙間。あれこれということは2つ。

ようやくすいてきたように感じた空腹感を満たすのは先に進むために必要と昔の名残のように動機付けとある食事所に入り注文品を一口口にしたがそれ以上食が進まなかつた。食い逃げではあるまいがそのまま帰ることの申し訳なさが誰にも見つかれないように店を出ようという気持ちに拍車をかけた。

店を出てすぐにも口に口内炎ができそうな感じは、内部からの血口崩壊の励ました。

その後、食事無しで故郷の山の入り口に立つた。

2級。私は2級だが私は違つ。1級、いや特級だ。私は自己分析ができる私は2級品だ。そしてそれすら危うい。時々がたつく。焼きが回る。流される。それはもう2級ですらない。維持、維持に努める。2級とは3級の上。1級のした。そこにいること居続けるこ

と。

私が2級から特級に上がったのはリアル世界ではなかつた。最初そこでも2級そこそこの私がいたのだが私を導いてくれる師のもとで私は成長した。

誰とどんな時間を生きるか。

師はここも一つの世界だと入つた。現実もそんなに変わらない。だから誰とどんな時間を生きるか。私にしてみれば師と過ごす時間が人生の意味に感じられた。私はただ生き時々ふさぎ込んだり時々ぎやあぎやあさわぐだけのやつではなくなつていつた。目的を持ち仲間を集め達成し、反省し成長していくた。そのなかに師がいた。いつも師が見守つてくれていた。助言を仰ぎ、時にひとりで判断し、時に助けられたり助けたりした。

それでよかつたのに、時が来たなんていつて見捨てられるなんて。それだけならまだしも裏切られるなんて。ただの仕事で義務で心ない言葉をかけてきていただけだなんて。

猛然と生きた。見たくないものを見ないために少々の見たくないものは師の喪失に比べれば見たものに過ぎなかつた。

毎日戦つた。一日が一時間のようだつた。息つく暇もなかつた。誰かが替わりに眠つてくれる気がしていだ。食事の間すら惜しんだ。昇り詰めた。昇りつめていた。

私にかなうものはなく私ほど知るものはいなくなつた。私は世界を知り尽くした。新しい明日がくればすぐにも飛びついで先頭を切つた。中盤も事後処理も、新人教育もみな引き受けた。私は2級のままだつた。時々落ち込んで崩れつつもその世界での私は1級であり特級であつた。

私の意のままに動く片割れが数人。私を慕うもの、半ばあきれつともついてくる仲間。敵対する勢力。私はそれらに立ち向かう。もがき苦しむがやがて快方に向かう。人々の賞賛、伝説、噂話。私は今日もここに生きる。

自らそれを試す。山の中で。

生きて帰ればそれすなわち不老不死の薬をえたこと似なるのではないか。

自然対自分 自分対自分 2たい1。

巨人対こびと 自分対自分

絶食状態に耐えられるようになつたぼくは夜になるのを見計らつて山に入った。それは端からみれば死にいくようなことであり、ふらつと近所の自動販売機までサンダルでいくような所ではなかつたからだ。

幸いリュックはしょつていたからそれなりの格好ではあるのだろうが、ぼくは死とか恐怖とかは抱かず進んでいった。山へ向かい進むとはすなわち頂上にいくことなのだろうが進む方すら途中からビックリでもよくなつてしまつた。

登山道をそれこそ獸道を進む。朝露の滴はそれこそ甘露であつたし山の霧は体にしみるようだつた。恐怖など感じない。暗闇を恐れない。眠くなると眠つた。幸い季節は温暖で瓶中の酒一杯に頼るだけで眠ることができた。ぼくは山を彷徨う。命がかかっていることが半分くらいしか理解できていない。なでかおそれなどないのだ。異常な行動に違いない。無謀な行動である。が、それすら気にしないあるいは最初から感じなければただの散歩だ。ぼくは目が覚めていた。だから進み続けた。道に迷い村落にたどり着けばそれで終わりだとも考えていた。

ただ、山の奥に進んでいる気はしていた。

眠つているようで眠つていないのだ。本当に眠つていれば死んでいてもおかしくはない。いじじのよい日当たりのよい場所で太陽の光を浴びるのは日課になりつつあつた。風の吹く向きがかわる瞬間がある。気圧というのだろうか天氣の変わり日、昼と夕の境目夜の兆し、ぼくは山の中に居場所を見つけようとしていた。これは本能

なのだろうか。定住にはしる。歩き進み続ける」との意味などないのだろうか。

体が一回りちいさくなつた感じだが小さな塊としてとぎれすまされた気がよりいっそうする。

山のものを食べる。見分けて食べる。必要な分だけ食べる。うまくできている。山が生かしてくれる。

移動が定住か、山が生かしてくれることを知ったときから定住が始まった。縄張りを決めてその周囲を田があるきまわる。何のためか、食料を得るため。悲しいかな食料を得るため。帰つてすみかで酒を飲んで心地よい眠りにつくため。

それはおかしいのではないか。夢を見た。続きがあるのだ。まだ夢を見るのだ。先へ進まなければならない。山が生かしてくれるのはわかつた。ぼくは山に捧げるのだ。ぼくは不老不死の極意を薬を手に入れれるのではなかつたのか。

山から帰るのではないのか。

それは頂上を目指すことだつた。あるいは進んだ。かなり鼻がきくようになつていたし無理もしなかつた。計画といえれば計画通り予定通りにことは進んだ。

頂上に立ち一晩休んだ。寒かつた。朝日が上がり暖かかつた。ここでは定住できそうになかつた。そして進む道ももはやなかつた。立ち往生が続いた。そこで生き続けた。

そこにいるだけで生きていることだつた。

なにかが麻痺してくるようだつた。戻ることは考えつかなかつた。先の道は決して見えてこなかつた。そして心地よい眠りは訪れなかつた。

ある夜、出会つた。

夜だつたが白い霧の束が立てに見えた。

杜氏の息子さんだとなぜかわかつた。

彼は言つ。

今は山と山を渡り歩いてる。

山の名前はそこに住む人の名前もある。大抵の山には名前がついている。そこには必ずいる。

人が。ですか、ぼくは言つ。

人がいる。

名前のついていない山にも名前がある。
われわれの世界の名がある。

山は名を捨てるときがある。そのとき子を選びそこに残す。

私は今山を渡り歩いている、やがていつかどこの山の名になるだらう。お前もそうしないか。

私のいつていることが、おかしくないか、お前はわかるだらう。腹が減つてないのに食べあいしてないのにあいしおかしきないのにわらうなきたいときになかずやすみみたいときによりますいいたくもないことをいう。

お前もこっち側にこい。

もう半分以上こっちに来ている、あとは意識だけだ。こっちにいる
という自覚だけだ。

目覚めているからもう眠らなければいい、食べなければいい、呑まなければいい、感じなければいい。

それが不老不死ですか。ぼくは杜氏の息子にいつた。

500入れて500だす。のが生活。1000入れて1000だす。
入るものと出るのは違う。常に自分であり自分でない。
山では

5000入れて自分を500にして元の自分を出す。

10000入れて自分を10000にして元の自分を出す。

やがて50000のものになり10000000になり5000
000になり

意識がとおざかる。

夢の中だった。杜氏の息子は龍藏と直つのだつた。お前は寝てしまつた。お前はここにこれない。まだこれない。起きたらいこひを去れと言つた。

ぼくはなまゝいわにやあなたいを下りて私と来ませんか、杜氏にあつてやつたるどりですかと直つた。

龍藏は無言だつた。

霧のようで光り輝いてまぶしくて日を開けると直だつた。
ぼくは山を下りた。

道は街へと続いていた。

果てしなく続いて迷路のよつだつた。
ぐるぐる回つたがようやく家にたどり着いた。
そこではぼくはまた寝た。

くと思われる

続

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0829/>

兵士不純1 10

2010年12月17日19時09分発行